

領域横断的共同研究における研究者間協働に関する探索的研究

——A 研究所における領域横断的プロジェクトを事例に——

日本学術振興会特別研究員 PD (広島大学) 湯川やよい

1 問題意識と研究の目的

本報告では、異なる思考習慣をもつ専門研究者たちが、領域横断的な研究プロジェクトにおいてどのように協働関係を構築し、知識融合を模索しているかを事例的に検討する。

近年様々な研究活動において領域横断的アプローチの重要性が論じられる中、領域横断の過程では異なる思考習慣をもつ研究者間の「異文化摩擦」が必然的に生じることが繰り返し指摘されている。こうした研究者間の「異文化摩擦」は、ジャーナル共同体ごとに異なる妥当性境界（正当とされる知識の在り方と評価基準）のずれとして説明され、妥当性境界の競合や最終アウトプットにおける境界の変容（知識融合）に関して、主に定量データを用いた研究が蓄積されてきた（知識融合の程度を計量する研究など）。だが、こうした議論では、領域特性が研究者の多様性を形成する諸要素の中で相対的に自律したものとして扱われることが多く、実際の境界競合場面に埋め込まれた他の様々な関連諸文脈（たとえば、各研究者の出身組織・所属組織やキャリアパス、職位、研究教育環境なども含めた思考習慣の総体）との連関には、必ずしも十分な注意が向けられていない。本報告では、領域横断的研究における協働作業のローカルレベルに接近し、様々な背景をもつ研究者たちが相互に異なる妥当性境界をどのように提示し、調整しているかを考察する。この作業を通じて、境界の変容が志向される際の課題や論点を検討したい。

2 方法

上記の課題を検討するため、学際的研究プロジェクトが数多く行われている A 研究所でのフィールドワーク（2014 年 1 月～現在継続中）で得られたデータを用いる。報告では特に人文科学系から自然科学系まで多様な領域の研究者たちが協働するユニットでのプロジェクトに着目した。なお、調査は現在も継続中であるが、報告では主に 2014 年 6 月上旬までに得られたデータについて考察を行い、暫定的な検討結果を示す。

3 考察と結果

考察の結果、以下の 3 点が浮かび上がった。（1）まず、アウトプットにおいて既存の妥当性境界とは異なる境界の変容が志向される程度は、メンバーそれぞれのプロジェクトへの関与状況（特に常勤・非常勤の別や、ユニットリーダーとの距離）によって異なっている。（2）また、妥当性境界のずれを調整する作業は、必ずしも領域特性のみに還元できない人間関係上の諸課題と絡み合うことで、アウトプットにおける境界を固定化／変容させる契機を生み出している。（3）なお、知識融合をめぐる志向や程度は、プロジェクトのフェイズごとに変化している（具体的には、研究デザイン～研究初期→中間評価とフィードバック→研究後期～アウトプットの各段階において程度が異なり、その交渉のあり方も変化している）。特に研究が深化する研究後期には妥当性境界をめぐる領域間での競合は後景化し、メンバーそれぞれが自らの境界を変容させる必要性（知識融合の必要性）を認識し協働が進められている。だが、同時にそのプロセスでは、イメージとして共有される理想的な知識融合を実現することの困難もまた、強く認識・共有されている。報告では、フィールドノートやインタビューデータを用いて、上記の論点を詳述していく。